どもる子どもたちのことば

宇都宮市立宝木小学校　髙木　浩明

地区のことばの教室担当者の研修会で、「治したいという保護者や子どもたちに対して、自分はどもりを治せないとは、なかなか言えない」「そう言ってもいいのか、不安になる」といった声が聞かれました。このことを踏まえて、いま自分が一緒に学んでいる子どもたちに「治せない」ことを聞いてどう思ったのか聞いてみました。（やりとりの中から、子どもたちのことばをまとめています）

〇４年生　かえで

治せないと聞いて、最初はショックだった。だけど知った方がいい。知らないと治せるのかと思ってしまう。そういうふうに勘違いしていると、どもるたびに、（自分が）ダメだった感じになる。

どもることをそれほど知らない時でも、どもっていると「どうして、こうなるの？」となるから、最初から知っていいと思う。幼稚園でも大丈夫。

わたしは（通級の）途中から治せないことを知ったから、ショックが大きくなったのかも。（言われたことが）本当か迷うし、「ええー、そんなの最初から言ってよ」となる。

最初に言ってもらうと、あとが楽になる。ふつうに聞けるからその方がいい。

どもりの仲間がいること。どもる人がいっぱいいて、今もその人たちはどもるけれど、ふつうに楽しく生活してることを伝えれば、安心するし、自分もそういうふうに生活していけると思う。

〇２年生　たいせい

どもりが治せないと聞いて、「へーそうなんだ。やっぱり・・・治せない気がしていたから」となった。だけど少しショックだった。

ぼくは、最初に聞いた方がいいと思う。それを知って、これから先どうやって、どもりのことを研究するかを考えるようになるから。最初に知らないと、はじまりが変になる。途中で変更はなし。ショックが２倍くらい増える。

治せないことと一緒に、どもる人がいること。ふつうに生活していて、元気にどもる人がいることが分かったらいい。

〇６年生　かずとし

ぼくは、５年生の時、どもりの原因も治す方法も見つかっていないと聞いて、悲しくなった。ショックが大きかった。それまで先生から「治る」「軽くなる」と言われてはないけれど、「まずは、ことばの教室でいろいろがんばってみよう」と言われて、「がんばれば、きっと治せるんだ」と勝手に思っていた。その先生のことを恨んだりはしないけど、少し嫌だなあと思う。途中で変わるのは、やめた方がいい。

今は、治せないと知って良かった。どもる子が他にもいて、元気だ。大人のどもる人がいて、どもりながら楽しく生きていると知ったから、前よりどもりが気にならなくなった。３年生頃は100ぐらい気になっていたけど、今は40ぐらい。将来は20から30ぐらいになればいい。0にはならないし、ならなくても大丈夫。

担当者である自分にはどもりを治せないことを伝えたとしても、それは「治したい」と思う子どもの気持ちを否定しているわけではなく、この３人は今でも、「どもりが治ったらいいなあ」「治らないかなあ」という気持ちがあると話しています。また、「どもったから、伝わっているか心配だなあ」「発表している人を見ると羨ましいし、自分もそうなりたいけど、どもるから積極的にできないのは、しょうがいない」「どもると間違いだとまわりの人に思われるかもしれないし、どもらない方が話しやすいから、やっぱり治ったらいいなあと思う」といった話も出てきます。これから先、まだまだいろいろなことがあり、時にはもっとしんどい気持ちになることがあるかもしれません。ただ、そうした日常生活で様々な出来事があって、思いが生じたとしても、きっと何とかやっていけそうだというレジリエンスのある姿を見せているのだと、自分は感じています。